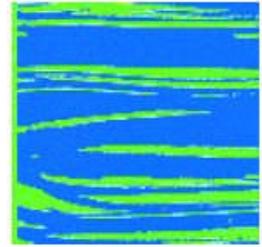


日本行動分析学会ニューズレター

# J-ABAニューズ



2014年 夏号 No.75 (2014年8月25日発行)

発行 日本行動分析学会 理事長 園山繁樹  
〒540-0021 大阪市中央区大手通2-4-1 リファレンス内  
FAX : 06-6910-0090 (日本行動分析学会事務局と明記) URL : <http://www.j-aba.jp/>  
E-mail : [j-aba.office@j-aba.jp](mailto:j-aba.office@j-aba.jp)

---

|  |            |
|--|------------|
| 日本行動分析学会第32回年次大会を開催して.....             | 平岡 恭一      |
| 日本行動分析学会第33回年次大会のご挨拶.....              | 竹内 康二      |
| 本学会の一般社団法人化に向けて(続).....                | 理事長 園山 繁樹  |
| 決定:2015年ABAI日本大会を京都で開催!.....           | 杉山尚子       |
| 行動分析学の歴史インタビュー②.....                   | 山口 薫       |
| 自著を語る:『使える行動分析学—じぶん実験のすすめ』.....        | 島宗 理       |
| J-ABA2014体験記(1):「基礎と応用が共存する学会として」..... | 中村 敏       |
| J-ABA2014体験記(2):「第32回年次大会に参加して」.....   | 中田 篤志      |
| ABAI2014体験記(1):「大きなご褒美、新たな刺激」.....     | 岡 綾子       |
| ABAI2014体験記(2):「初めての国際学会参加」.....       | 三島 大輝      |
| 編集後記.....                              | ニューズレター編集部 |

---

## 日本行動分析学会第32回年次大会を開催して

第32回年次大会準備委員長 平岡 恭一(弘前大学)

思えばすべての始まりは、2008年横浜国立大学での年次大会の際中華街で開かれた飲み会からの帰り道、真邊一近先生から、4年後に大会をやってくれないかと打診を受けたことでした。当学会の年次大会はさぼりがちで決して優等生とは言えない私にそのようなことができるのだろうかと不安でしたし、その後東日本大震災があって気持ちがくじけたこともありました。それでもなんとか2014年の開催が決まり準備

委員会が発足したのは、2013年3月のことでした。委員構成は、県内在住の学会員と特別支援学校関係の教員、そして私が指導している博士課程の学生でした。特に特別支援学校関係の委員の多くは数年前に弘前大学で特殊教育学会を開催した時にも関わっており、そのノウハウを役立ててくれたので、体制は強力なものになりました。またそのつながりで、日に日に大会当日の手伝いを申し出てくれる人が増えていくのは

心強いものがありました。同時に弘前大学生協に相談し、かなり業務委託できることがわかりました。何でも大学生協連合には学会サポートの部門があるのでそうです。

このように比較的早くから取り組んだ部分があった一方で、具体的な作業が始まると思うように進まなくなりました。特にホームページの立ち上げや発表論文集の発送などが大幅に遅れてしまい、会員の皆様には大変なご心配とご迷惑をおかけいたしました。この点については、過年度開催校からの申し送りがあったにもかかわらず、生かすことができず、大変申し訳ありませんでした。

また、大会企画等については、当初ポスター発表を除けば、大会講演で地元タレントの伊奈かつべい氏を呼ぶことしか決まっていなかった。その他の企画が動き出したのは、大会の数ヶ月前でしたが、学会の各委員会の方々のご尽力により、つぎつぎと決まって行きました。まことに有り難いことでした。

さて、大会期間中のことについては正直申してあまり詳しくは覚えておりません。まるで夢のような3日間でした。それでもいくつか記憶をたどってみると、初日の自主企画シンポジウムは、参加者50名未満という予想に反し100名近い参加者がありました。同様なうれしい誤算は2日目の小講演でも起こり、会場準備等でご迷惑をおかけしました。大会企画講演では、伊奈かつべい氏の軽妙なトークに、会場は幾度となく爆笑の渦が巻き起こりました。準備委員会としては、とにかく笑って楽しんでもらおうと考えておりました。

たので、「学会でこんなに笑ったの初めて」という参加者の声を聞いたときには、やってよかったと思ったことでした。他のシンポジウム等でも熱心な討論が行われたと聞いております。2日日夜の懇親会は弘前大学生協に任せきりで、会場も生協食堂の一角しかとれずあまり立派ではなかったと思いますが、地元料理と学生サークルによる郷土芸能をお楽しみいただいたようで、何よりでした。最終的な参加者数は予約・当日合わせて289名、ポスター発表84件となりました。

終了後1ヶ月余を経て思うのは、本当に沢山の方々に支えられた大会だったなあということです。開催が決まってから終わるまで、年次大会支援委員長の中島先生には細かい点に渡ってご指導いただきました。高知大会の山崎先生と岐阜大会の平澤先生には各大会期間中のお忙しい中直接お話を伺いました。当初からマンパワーの不足を心配しておりましたが、地元特別支援学校関係の多くの方々のお手伝いがなければ何も動かなかったと思います。それから今大会は弘前大学生協の多面的なバックアップを受け、会計業務や懇親会、弁当、印刷関係など細かいところまで気を配ってもらいました。その他学生アルバイトを含め多くの皆さんに支えていただきました。準備委員会を代表し、改めて心からお礼申し上げます。3日目の夜、後片付けが終わって帰りになじみの居酒屋に寄った私は、一人ビールを飲みながら、何とか無事に終わった脱力感とともに皆様への感謝の念をかみしめておりました。

---

## 日本行動分析学会第33回年次大会のご挨拶

### 第33回年次大会準備委員長 竹内 康二（明星大学）

このたび、日本行動分析学会第33回年次大会を東京都日野市の明星大学にて、2015年8月29日（土）～30日（日）に開催させていただくことになりました。明星大学での開催は1995年の13回年次大会以来のちょうど20年ぶり2回目となります。20年前とは校舎も変わり、また多摩モノレールの駅（中央大学・

明星大学駅）が隣接していますので、8月の暑い時期ですが汗を流しながら長い距離を歩かなくてすむかと思っております。比較的交通の便もよく、都内のホテルをご利用いただけると思っておりますので、準備委員会からのホテルの紹介は控えさせていただきます。2015年はわが国での国際行動分析学会 ABAI 国際会議の

開催も予定されており、行動分析学関係者には何かと忙しい年になりそうですが、たくさんの会員の皆様のご参加をお待ちしています。何かと至らないことが多いと存じますが、年次大会支援委員会のご支援をいた

だきながら、発表者および参加者の皆さまが活発な議論ができますよう快適な環境を準備させていただきますので、よろしくお願いたします。

---

## 本学会の一般社団法人化に向けて（続）

理事長 園山 繁樹

去る6月28日（土）に弘前大学で開催されました年次総会におきまして、「本学会を一般社団法人化する件」が承認されました。一般社団法人化することの意義、主な変更点、並びに今後のスケジュールにつきましては、年次総会資料並びに前号のニューズレター（No.74）でお示ししました。スケジュール（案）については、以下のとおりです。

- (1) 2014 年度年次大会時の会務総会にて以下の事項を提案（2014 年 6 月 28 日承認）。
  - ・2015 年 4 月 1 日に一般社団法人日本行動分析学会を設立する。（会員、財産等の移転）
  - ・任意団体としての日本行動分析学会は適当な時期に解散する。
  - ・一般社団法人日本行動分析学会設立準備委員会（現常任理事と野呂理事）を設置し、法人化の準備を行う。
  - ・一般社団法人設立時の代表理事・理事・監事・社員（現常任理事）。
- (2) ニューズレター、ホームページ等で法人化についての説明、会員からの意見募集。
- (3) 設立準備委員会において定款等の作成。
- (4) 一般社団法人日本行動分析学会の法人設立登記（2015 年 4 月 1 日）。
- (5) 2015 年度中に代議員選挙を実施。

- (6) 第 1 回社員総会（代議員）において理事・監事を選任。
- (7) 2016 年度年次大会時の年次総会にて任意団体（現学会）を解散。
- (8) 一般社団法人日本行動分析学会としての活動を本格開始。

当面は、一般社団法人日本行動分析学会設立準備委員会（現常任理事及び野呂理事）において法人化の準備を行います。定款等の案が作成できましたら、随時、学会ホームページやニューズレター等で会員の皆様にお示しし、ご意見をいただく予定にしております。学会ホームページをご確認いただきたくお願いたします。

併せて、本来であれば今年度が理事選挙に当たりませんが、一般社団法人化できるまでは現役員体制のままとし、一般社団法人化後の 2015 年度の早い時期に代議員選挙（現在の理事選挙に相当）を実施することも承認されました。加えて、学会論文賞は規定では「選挙は理事改選年度に実施する」となっており、今年度は理事選挙を実施しませんが、学会論文賞の選挙は行うこととしました。

会員皆様の学会活動には支障のないよう進めて参りたいと存じますので、一層のご協力を賜りますようお願いいたします。

---

## 決定：2015 年 ABAI 日本大会を京都で開催！

杉山 尚子（星槎大学大学院）

隔年で開催される ABAI 国際大会は、故佐藤方哉先生が会長職にあられた時の提案が実現したものです。2015 年には、第 8 回大会がついに日本で開催されることとなり、このたび日程と会場が以下の通り決定しました。9 月 1 日に ABAI ホームページ上で正式発表される前に、日本行動分析学会のみなさまにはいち早くお知らせ申し上げます。そして多くのみなさまの

ご参加をお待ち申し上げます！

日 程：2015 年 9 月 27 日（日）～29 日（火）  
会 場：ホテルグランヴィア京都（京都駅直結）  
申込開始：2014 年 9 月 1 日より ABAI ホームページから申込

## <行動分析学の歴史インタビュー②>

# 日本行動分析学会の誕生

日本行動分析学会初代会長 山口 薫

国内外の行動分析学の歴史に関する資料の収集と保存のプロジェクト、第 2 弾の今回は、学会創立三十年記念事業実行委員会との共同企画として、わが国の応用行動分析学の草分けであり、本学会初代会長の山口薫先生にお話をうかがいました。

井澤信三（以下、井澤）：山口先生、どうぞよろしくお願ひいたします。

山口薫先生（以下、山口先生）：よろしくお願ひいたします。

### 行動分析学との出会い

山口先生：まず日本に応用行動分析を組織的に導入したのが私、それと続いて東正さんということになると思うんですけど、それ以前にも片岡義信さんってご存知ですか？ 福島教育大ね。あの人が昔は宮城県の県立の養護学校の先生をされていてね。それで自分で勉強して実践をしたりしておられたという、そういうこともあるんですけど。組織的導入ということになると私が 1967 年から 8 年にかけて、約 1 年間、フルブライトの研究者としてイリノイ大学のシドニー・ビジュ先生の下で応用行動分析学を学んだこと。それに続いて、その当時は北海道教育大の先生だった東正君が、今度は文部省の在外研究者として私の紹介

で、ビジュ先生のところで 1 年間学んでと。それからビジュ先生とベアー先生が 1960 年に共著で出した「CHILD DEVELOPMENT I: A Systematic and Empirical Theory」を私と東君で、ビジュ先生に勧められて翻訳をして、1972 年に「子どもの発達におけるオペラント行動」\*1 として、日本文化科学社から出版をしたという、これが一つ大きなきっかけになったかなと思うんですね。

私は実はビジュ先生のところへ行くまでは、行動分析学は、もうほとんど何も知らないで行って、1 年間学んでいく中で、ビジュ先生の講義そのものも非常に学ぶところが多かったんですけども、アメリカのある学会で、ビジュ先生が司会をされていた分科会でですけども、ピーターソンという、その頃は若い研究者でしたけれども、自閉症で知的障害の子どもの自傷、壁に頭をガンガンとぶつけて、血だらけになってるんですよ。それを防ぐためにいつも毛布をかぶせていました。それを 7 日間、食事のたびに自傷が起ると、お皿を取り上げて、ある一定時間自傷がなければ、向き直って食事を続けるってね。そのプログラムで、1 週間できれいさっぱり自傷をなくしちゃったっていう研究。

その研究と、それからもう一つマドセンの、これもよく紹介するんですけども、小学校の低学年の子

もの、授業中の離席行動をどうやって少なくするかというね。これは ABAB デザインに、ちょっとバリエーションを加えたような素晴らしい実験プログラムを作って、これも非常に効果があるということが実証された研究。これは夏にビジュウ先生の大学院生のクラスでのマドソン自身の報告を私も聞いてね。この2つは本当にこう、すごい感銘を受けましてね。それでもう、私も本気で勉強するようになって。やっとなんとかある程度の勉強ができたんだなというふうに思います。

これも長くなるから載せられないかと思いますがけれども、元々はサミュエル・カークという、ご存知でないかわかりませんが、その当時のイリノイ大学の心理学の教授でしたが、東洋君は知ってます？

井澤：はい。

山口先生：心理学会の会長もした方ですね。

大河内浩人（以下、大河内）：はいはい。

山口先生：彼とは、旧制第一高等学校の時のボート部で一緒だね。寮で一緒に寝泊りした、1番の仲のいい友人なんですけどね。彼が全部で10何年いたかな、カーク先生のところで心理学を勉強して、助手になった人です。そういう関係で、私がイリノイ大学へ行く年の前に日本でNHKにカーク先生が招聘されて、あちこちで講演をして。その東で紹介されて僕はカークさんを頼ってイリノイ大学へ行くつもりだったら、カークさんがサバティカルかなんかでいなくなって、その後アリゾナ大学へ移って。それでもう途方に暮れてたら、カーク先生が、いや、自分がいなくなっても、こういう有能な、若い、素晴らしい研究者がいるっていうんで紹介してもらったのがビジュウ先生なんです。だからこういう、全くの偶然で幸運に恵まれて、今日の私があるわけで。私にとっては本当に、思ってもみない幸運だったんですね。

### 日本行動分析学会の誕生

山口先生：皆さんにいろいろ聞かれたりしたことで、アメリカの行動分析学会に佐藤先生と一緒にいったというのはいつかなど、調べてみたら、それが1979年ですか。

井澤：1979年6月ですね。

山口先生：それで、恐らくその前から佐藤先生とはなんらかのかたちで連絡はしていたと思うんですが。僕より若い方ですけども、とにかく日本に行動分析学

を導入した第一人者ですからね。だから佐藤方哉先生のところに、電話かけてお会いをしたりしました。佐藤先生は佐藤春夫の息子さんになるわけで、立派な家に住んでおられて、女中さんがいるわけですよ。年配の方ですけどもね。朝もう、9時か10時頃になって電話かけると、「お坊ちゃんまは今、お風呂をお召しになっております」って。そんな感じで、そのへんから付き合いが始まって。そしてその1972年に、私が東君と一緒に訳したビジュウ先生とベアー先生の本がある程度広がっていく中で、さらにいろいろ話が進んでいって。そして1979年ですね、シカゴに行ったのは、さきにシカゴへ寄って、それからディアボーンへ行ったんですよ。

井澤：それで、(インタビューの前に、山口先生と井澤がメールでやり取りしていた時に)シカゴができたんですね。

山口先生：それが記憶に残ってるんですよ。でも学会のことあんまり記憶に残ってないんですけども。だからそこへ誰が参加したかっていうのがね、どうも手帳見てもちょっと書いてないんですけども。浅野さんがいて、樋口君。これはもう確かなんです。あと、誰がいたかどうか。

大河内：出口先生と、富安先生。

山口先生：そう。出口さんと富安さんね。出口、富安。この二人はいたかまなかったっていうのはちょっと、記憶にやっばりないんですよ。それから、応用行動分析学の方はあんまりなかったみたいで。誰が参加したかっていうのは、ちょっと分からない。でもいずれにしても、それがきっかけになって帰ってきて、日本でぜひ学会を、基礎と応用が一緒になって作ろうじゃないかっていう話になって。そしてここにありますように頻繁に、研究会を開いたりする中で、1983年に日本行動分析学会が発足をしたと。こういう経過だと思うんですね。

井澤：日本行動分析研究会を立ち上げるまでは、山口先生が中心に？

山口先生：私と佐藤先生、それから浅野さんと樋口さんね。もうしょっちゅう、とにかくお酒が好きなもんだから、結局行くに必ずそのいきつけの飲み屋でね。飲みながら、かなり、例えば浅野さんと佐藤先生が激論を闘わすんですね。そういうふうな雰囲気の中で我々も仲間に入れてもらって。だんだんそういう気が盛り上がっていったのかなと思うんですけどね。

応用行動分析関係でいうと、確かに私と、それからもう1人は東正さんですね。「餌付け療法」といったりしたので、その後、あまり親しくなくなってきたんですけども、一応僕と東君が1番最初にそういうふうなことで、学会の設立に関わったということになりますね。

基礎の方はだから、佐藤先生が中心になったという。そちらはそちらでまた、別に調べていただかないと私もあんまりよく。基礎がどういふふうなかたちでっていうところがよく分からないんですけどね。

井澤：その当時の学会という、行動分析ができる前ですと、例えば、特殊教育学会とか、心理学会とか。

山口先生：日本心理学会っていうのは、いろんな関係団体をまとめるようなかたちであったわけですよ。だから日本心理学会との関係っていうのは、日本心理学会の傘下にあるいろいろな心理学関係の団体の一つという関係。こういうことになりますよね。東君、東洋のほうね。彼はもちろん行動分析とは立場は非常に違うんだけれども、僕なんかを、発達というものをそういうふう考える立場もあるんだと、一応、ある程度の評価は東君もしてくれたりね。そういうふうな関連ですよ。日本心理学会との関係は。

井澤：あと、行動療法学会はどうでしょうか？

山口先生：そうですね。ただ、あんまり深い関係はないと思うんですよ。それはそれでやっぱり、それぞれ一派をなして、あんまり直接、共同でなんかしようっていうようなかたちではなくて、やっぱり先ほど言ったように、Radical behaviorism ですからね。だから、むしろそういうものとは違うぞっていうところを強調するような面もあったりしてね。だから、それほど直接一緒にやるっていうふうな感じではなかったように思いますよね。

佐藤方哉先生っていうのはね、なんというか、非常に個性がね。厳しい人ですからね。ただ、僕のことはどういうわけか非常に買ってくれたっていうのかな。これはぜひ入れておいていただきたいのは、学会を作るっていう時に、それじゃあ会長を誰にするかっていうね。僕は「それはなんて言ったって、佐藤先生を」って言ったのに、佐藤先生が、僕が二つばかり年上かな。年長だっていうんで、「いやいや」って推してくださったんですよ。だから佐藤先生に推されて、じゃあ1年間だけっていうことで私が引き受けてね。そして1年経ったあとで佐藤先生が会長に代わって、

それから理事会組織という。だから初代理事長っていうことになる佐藤さんです。会長ってことになる初代が私で、佐藤先生は2代目の会長と同時に初代の学会の理事長っていう。こういうことになるわけですね。そのあとは理事長制度で、今のままやってきてる。こういうことになりますよね。

井澤：その理事長制度というのは、やっぱりその方がよくなったのでしょうか？

山口先生：そうですね。学会というのは、やっぱり普通理事会を作ってやるのが普通の学会のあり方としては、心理学関係でもそうですからね。だからそういうふうにしよっていうふうには話が進んだと思います。ただ、僕はそのへんはあんまり記憶がないですよ。ぜひ理事会制度にしよう。だから佐藤先生はまず、学会の2代目の会長になられて、その時点から理事会にっていう話が始まって。そこから私はだから、あんまり直接関与しないで理事会制度に移行したんだと思うんです。そのへんは浅野さんなんか1番よく知ってるんじゃないかなと思うんですけどもね。

井澤：では、先生が初代会長の時には、いわゆる事務局はどうなっていたのでしょうか？

山口先生：当初、私の東京学芸大学特殊教育研究施設においていたけど、実際は佐藤先生のところで専らやっておられて。非常にこう、なんていうのかな。正式な事務局っていうふうな感じはなくて。研究会なんかも、学生の方が手伝ったりはしてたとは思いますが、特にはっきりどなたかっていう記憶はないですね。だから浅野さんなんかはまだ大分若かったんじゃないのかな。浅野さんか樋口君なんかか。樋口君はでも、その頃東京にいたかな。なんかしょっちゅう会ってたけれども。要するに飲み屋で、話はいろいろしてきたっていうような感じでしたね。

### 行動分析学の未来

山口先生：ビジュ先生もそういうことを書いておられますけれども、要するに行動分析学というのは物理学とか生物学のような、自然科学のストラテジーを基にするんだと。ストラテジーとしては、自然科学の方法論を使うんだということ。発達についての考え方の中で、行動分析学というのは、自然科学の方法を使うんだっていうことが強調されてますね。そこはやっぱり一つのキーワードになるんじゃないかと思うんですね。それはもうちょっと具体的に言うと、要するに

観察可能であって、計測が可能っていうね。だから逆に言うと、スキナーが、脳の中のことはまだよく分かっていないから、それはあれこれ勝手に推測をしていくと、袋小路に入り込んで。もう、ごちゃごちゃして訳が分からなくなると。だから今は外に置いて、観察可能、測定可能な環境からの刺激と行動で人間の行動を分析していこうというふうにしたわけですね。だけでも「エバンスとの対話」の中でも言ってるように、自分は別に脳の中をブラックボックスというふうに考えているわけではない、ただそれがまだよく分かっていないから、今、外に置いてるだけで。いずれはそういうのが分かってくれば、当然取り入れられるだろうということを予測するようなことを、スキナー自身は言ってるわけですね。だから自分はS-R心理学者でもないって言ってますね。

その後、言語の問題が取り上げられましたが、その時点ではまだスキナーはあくまで行動分析学の原則に従って、脳の中でっていうことは抜きにしてね。その要約はビジュー先生が、分かりやすくと言ってもかなり難しいけれども、聞くということ、それから話すということ、その二つの機能に分けてね、解説をしますね。

それが今、脳の研究がその後どんどん進んできて、ここ<sup>2</sup>に書いておられますけれども、例えばミラーシステムっていうようなね。イタリアのジャコモ・リゾラッティの、猿の研究をしてるとき、たまたま発見して。そしてそれを元にして、一部だけじゃなくて、それがいろんなところと連合、連携をしながらミラーシステムというかたちで、もうかなりはつきりしてきてますよね。

それから今、ファンクショナルMRIというね。これがビジュー先生の本の中にも、脳波とかCTスキャンとか入ってますけれども、今もう、ファンクショナルMRIでいろんな研究が進んでるわけですね。特にLDなんかでね。LDHDの研究で<sup>1</sup>期<sup>2</sup>の、ファンクショナルMRIを使った研究も。これはまさに観察可能・計測可能なデータとして出てきてるわけです。これは当然私は行動分析の中に取り入れていいんじゃないかなと。

もう一つは、これまでほんの一部しか分かってませんけれども、FOXP2というのがね。これは人間とチンパンジーの遺伝子が解明されて、その差が僅か1.2%なんです。98.8%一致してるんですよ。チンパ

ンジーと人間は。だから人間とチンパンジーの遺伝子の差というのは、ほんの1.2%しかないんですね。だからその1.2%に人間が人間たるものがあるわけで、FOXP2がまた、言葉と非常に関係あるということが今、明らかにされつつあるというね。この研究がもっと進んでくれば、ビジュー先生のスキナーのVerbal Behaviorについての考え方にも、もう少し脳の中のFOXP2で新しくこれから解明されるようなものが取り込めるようになるんじゃないだろうかと。というね。

それからもう一つは、これは茂木健一郎さんが書いた、ちょっと啓蒙的なものだからあまり学術的ではないかもわからないけど、快楽中枢っていうね。大脳の基底核の黒質から排出される、ドーパミンの作用なんですけどね。それがものすごいスピードで、ある刺激によって脳の興奮してる部分にぶち当たるっていうことで、快楽を感じる、それを快楽中枢っていうふうに呼んでるわけですよ。その快楽中枢からのドーパミンが、興奮してるところにぶち当たるっていうのは、これは正の強化なんです。だから要するに強化の原理というの、脳の働きの中で解明されるのも、私はそんなに時間はかからないんじゃないかと。もちろんまだ、脳の中で分かっているのはほんの僅かで、分からないことのほうが多いんだけどね。日進月歩ですけどね。どんどん研究が明らかになってくれば、脳の中っていうのも観察可能で、計測可能で、実証的なデータがちゃんとしたものについては、行動分析学の中に取り込むことができるんじゃないかと。これは私は今までの行動分析学の脳の中の方を抜きにしてっていう考えから言うと、ちょっと異端的な考え方なんでしょうけれども、この中<sup>2</sup>にかなり詳しく書いてありますので。そんなに遠くない時点で、私はもう生きてないかも分からないけど、必ず行動分析学がその考えを広げるような方向に進んでいくんじゃないだろうかと。それが私の行動分析学の、今後の課題というか展望というかな。ということなんです。

井澤：ありがとうございます。大河内先生、追加で何かありますか？

大河内：もうたくさんお話を伺いましたので。

井澤：そうですね。

山口先生：ただルリヤ先生ね。これはものすごく面白いですよ。ルリヤの考え方そのものはね。これはあくまでも、直接観察できないところへ踏み込んで、仮説を立ててるわけですけどね。脳のダイナミックなシステ

ム的機能局在説というね。これがルリヤの考え方なんですよ。これがミンスキーなんかの脳の小人の、いろんな小人軍が連携をするっていう考え方に繋がるんですよ。

それと、フロイトが、死ぬまで、いつか脳の研究が進めば、脳の働きで人間の行動を説明できるようになるだろうと言ってるわけですよ。それが、フロイトが死んだあと、奥さんが資料を古本屋に売っぱらっちゃったんだね。散出しちゃったのをイギリスの政府が全部買い戻して、それが今アメリカの国立公文書館に所蔵されていて、2020年に公開されるんです。フロイトは、脳細胞の発火の法則なんかもちやんと、ヘップよりも先に発表していますしね。元々ヤツメウナギの脳の研究をしていた脳科学者ですから、フロイトは、だからそこにも必ず繋がるんじゃないかと考えております。

注

- \*1) Bijou, S. W. & Baer, D. M. (1961). *Child Development I*. Context Press. 山口薫・東正 (1972). 子どもの発達におけるオペラント行動. 日本文化科学社
- \*2) 山口薫 (2014). 共生科学の展望—星槎大学名誉教授就任記念最終講義を中心に— 共生科学, 5, 1-14.

インタビュー日：2013年11月17日

インタビュー場所：吉祥寺東急イン

インタビューア—井澤信三

(学会創立三十年記念事業実行委員)

：大河内浩人

(広報委員)

## <自著を語る>

# 『使える行動分析学—じぶん実験のすすめ』

島宗 理 (法政大学)

「ロビンソン・クルーソーにもできるのが行動分析学なんだな」

いつだったか、どこだったか、他に何を話していたか、誰と一緒にだったか、それ以外のことはまったく思い出せないのですが、故佐藤方哉先生のことばとして時々よみがえる記憶です。

科学哲学を論じるのにスキナーが用いた比喻 (Skinner, 1945) を参照しておられたのでしょうか。それがわかったのは随分と後になってからのことです。

方法論的行動主義にもとづく心理学は他者との同意を真理の基準に採用します。ですから、無人島に一人残されたら、誰にも同意を求めることができず、研究は進められません (クルーソーにはフライデーがいましたが、まあそれはおいておきましょう)。

一方、徹底的行動主義にもとづく行動分析学では、行動と環境との機能的な関係が再現されることを真

理の基準に採用しています。だから、それが確認できれば自分一人でも研究に取り組むことができるのです。

行動分析学では“ひとり実験”が可能ということになります。

視点を少し変えてみましょう。研究行動の制御変数についてです。

他の心理学では同じ基準を共有する他者で構成される言語共同体 (学会や学界) が、研究行動を強化する随伴性を提供してこそ研究が進みます。これに対し、行動分析学の場合には、探求している行動が制御されること (制御変数がわかること)、そのこと自体が研究行動を強化します。極端な話、学会や学界という社会システムがなくても、研究方法を伝達する教育システムさえあれば、研究行動は自発され、維持される可能性があるということになります。

研究方法を伝えることで、誰もが行動分析学の研究を進められるようになるかもしれない。本書はそのような作業仮説を念頭に書きました。明示はしていません（暗示してはいます）。この記事はネタばらし的な裏話とお考えください。

作業〈仮説〉とはいえ、受講生が学期を通してじぶん実験に取り組む授業は、実際に、もう何年も続けています。これまでに提出されたレポートは数百にも及びます。授業をしていると、受講生が間違いやすいところや見落としやすいところなどがわかってきます。本書ではそうしたよくある失敗や失敗を回避迂回する方法を、かなり細かく、具体例をあげて解説しています。

ただし、誤解がないように書いておきますが、本書を読めばそれだけでじぶん実験に取り組めるわけではありません。有効な教育システムには練習する機会とコーチングを受ける機会が必須です。“頭でわかること”（わかったような気になること）と実際にでき

ることは別のクラスに属する行動ですが、そうした機会はなかなかありません。

本書をきっかけに、自らの行動変容に挑戦しながら行動分析学や研究法を学ぼうとしている人に、練習とコーチングの機会を提供すること。行動分析学会の会員の皆さまへのお願いです。

Skinner, B. F. (1945). The operational analysis of psychological terms. *Psychological Review*, 52, 270-277.

島宗 理 (2014). 使える行動分析学—じぶん実験のすすめ ちくま新書

---

## <J-ABA2014 体験記 (1) >

# 基礎と応用が共存する学会として

中村 敏 (大阪教育大学大学院教育学研究科)

日本行動分析学会の第 32 回年次大会は、弘前大学を会場として開催されました。青森県という場所は、ご存じの通り本州の最北端に位置しています。正直なところ、関西に居住している私としては、今年の会場を聞いた当初は、移動にかかるコストを考えて頭を抱えたことを覚えています。もしかしたら参加者が少ないかもしれないのではないかと邪推していたのですが、実際の会場では多くの方がプログラムに参加していました。数字にすると 300 人以上の参加者がいたとのことですので、行動分析学という学問の魅力が人を惹きつける力を改めて実感致しました。

行動分析学会は、基礎的分野と応用的分野が共存している稀有な学会であり、この点が魅力のひとつであると思われます。年次大会でも、基礎的分野と応用的分野の両方のプログラムがあり、幅広い分野の知識を

共有することができます。今回のプログラムでは、基礎的分野として、対応法則・価値割引についてのシンポジウムが開催されました。特に価値割引は、対応法則から発展した基礎的な側面と衝動性、セルフコントロールと関係する応用的側面を持ち合わせており、両分野を越えて注目されている概念のひとつでもあります。また、応用的分野として、教育における応用に関するシンポジウムが開催されました。中でも、近年注目を集めているインクルーシブ教育が大きな焦点となっており、そのシステムの問題や生徒・教員への支援について多くの話題が提供され、議論がなされました。

また、今回のプログラムでは、新たな試みもなされました。そのひとつが大会企画講演であり、タレントとして活躍されている伊奈かつぺい氏をお呼びして

講演と対談が行われました。この講演は、準備委員長の平岡先生による「遠くから来られた学会員の方々に楽しんでもらおう」というご好意から企画されたものであるようで、伊奈かつぺい氏の講演はその意図に沿うように各所から笑いが起こるような楽しげなものでした（伊奈かつぺい氏は行動分析学を全く知らない立場から発言されており、中には行動分析学を研究する者として耳の痛い話もありましたが）。講演中は伊奈かつぺい氏によって平岡先生が何度も引き合いに出されており（砕いて言えば“いじられており”）、普段は見られないような珍しいものを見ることができました。また、行動分析学の普及という観点から国際的に活躍されている Paul Chance 先生による小講演も開催されました。国内で活躍されている学会員の方や、私のような若手の研究者にとって、海外の方のお話を聞ける機会というのは貴重なものであります。英語による講演でしたが、島宗先生による解説もあったため、リスニングの技術が不十分な私のような者でも安心して講演を聞くことができました。行動分析学の普及という観点からの講演内容も非常に刺激的なものでした。

シンポジウムと並行して、ポスター発表も開催されました。ポスター発表は、ご高名な研究者から若手の院生まで多様な方々が発表者として参加しており、聴講者とリアルタイムで議論ができる場であります。私は、実際に議論が交わせるポスター発表の場に大きく強化されています。残念ながら今回も発表者として参

加することはできませんでしたが、来年こそは自分も発表者としてこの場に立ちたいと考えております。ポスター発表は魅力的なシンポジウムと並行して行われるため、どちらに参加するかいつも悩ましく思います。また、2時間という時間では多くの発表の全てを回るにはとても足りないため、どのポスターを聴講するかという点でもいつも悩んでしまいます。今回のポスター発表でも、私の研究している領域を研究されていた発表者の方と時間を忘れて議論してしまい、多くの発表を聞くことができなかったことを後悔しています。

行動分析学は基礎と応用の両側面を持つ学問であり、行動分析学会の年次大会でも基礎と応用の両分野について高度な知識を共有することができます。日々の研究では、どうしても基礎の方は基礎研究、応用の方は応用研究に興味が傾いてしまうのではないかと思います。もちろんそれは悪いことではありませんが、両側面を持つ学会に組んでいる以上、両分野について幅広い知識を持つことが理想であると考えます。年次大会は、相対的に普段触れる機会の少ない研究の最新の動向を共有できる機会でもあるため、行動分析学を研究する者としては、継続して参加していく意義のあるものだと思っております。

今回の年次大会の参加の際に、関わって頂いたすべての方に感謝致します。また、今回の大会を準備、運営して頂いた準備委員会の皆様に深くお礼を申し上げます。

---

## <J-ABA2014 体験記 (2) >

### 第 32 回年次大会に参加して

中田 篤志（なでしこデイサービスセンター）

私は今年大学院を修了して、現在は個別療育の仕事をしていただいております、中田篤志と申します。本年 6 月 27～29 日に弘前大学にて開催された日本行動分析学会第 32 回年次大会に参加させて頂きました。年次大会への参加は一昨年と昨年に続き 3 回目でしたが、今大会では 28 日の午後から 29 日の午前のみとい

う短い時間での滞在となってしまいました。しかしその中でも大会企画講演を拝聴して懇親会にも参加し、ポスター発表をさせて頂くなど濃密な時間を過ごすことができました。短い時間の中ではありましたが、今大会への参加を通じて私が体験したこと等をご報告させていただきます。

私は今大会で初めて研究発表をさせて頂くということもあり、これまでの大会参加よりもそわそわと緊張しながら会場に到着しました。たいへん興味深いテーマであった価値割引のシンポジウムには間に合わず残念ではありましたが、午後に行われた伊奈かつぺい先生のユーモアに溢れた大会企画講演を拝聴することができ、伊奈先生の柔軟な思考と軽快なトークに度肝を抜かれ、その魅力に引き込まれました。

その後、28日の夜に行われた懇親会には今大会で初めて参加することができました。今大会には一人で参加していたため少し不安もありながら会場に向かいましたが、会場では学部生時代にお世話になった先生方にお会いすることができ、これまで一度もお会いしたことのない先生方の貴重なお話をお伺いしたり、同年代の方々と知り合うこともできました。また素晴らしい津軽三味線とよさこいのパフォーマンス、そして美味しい食事を存分に満喫できるなど、たいへん充実した時間を過ごすことができました。

懇親会でお会いした先生方のお話の中では、実験的行動分析の成果を現場にどう還元していくのかという話題には考えさせられました。特に私自身が学部生時代に学んでいた遅延割引をはじめとした価値割引実験の成果は、衝動性などの視点からヒトの行動の定量化を可能にできるものとしてたいへん興味深く思います。私も毎日の療育の中で衝動的な行動を示す子ども達と関わらせて頂いておりますが、選択実験ではヒトの行動モデルとしてシンプルに表現されている衝動性を、日常で現れる複雑な行動とどう関連させていくのかという点について、今後の研究動向がさら

に気になりました。

そして翌29日には、ASD児への選択機会提供の効果テーマとした研究を発表させて頂きました。私にとって初めての大会発表であったこともあり、発表前の時間はたいへん緊張し不安も募るばかりでしたが、発表を聞きに来て下さった先生方とお話させて頂く中で徐々に落ち着いていくことができました。頂いたコメントは実験の方法についてのものや、選択機会提供に関する新たな視点についてのものなど様々で、非常にためになるものばかりでした。また先生方とお話をする中では、分かりやすい説明をするための話し方についてたいへん考えさせられました。今回の発表では、まず大まかな概要を説明してから詳細な内容に移っていくように工夫することで、研究の要点を押さえながら説明しやすくなったと感じています。ポスター発表の時間を通じて、専門的な内容についての多くのご指摘を頂くことができただけでなく、今後の自分の為にも役立つ貴重な経験をすることができました。

私は今大会にはわずかな時間しか参加することができませんでしたが、その時間の中でも多くのことを学び、経験することができました。また本大会に参加したことで、弘前のたくさんの魅力ある文化や名産品に触れることができました。この地で得た経験や学んだことを療育の現場に還元し、一人でも多くの人達の力になれるように努めて参ります。

最後に、本大会でお世話になりました方々、大会の開催に尽力して下さった多くの方々に深く御礼を申し上げます。ありがとうございました。

---

## < ABAI 2014 体験記 (1) >

### 大きなご褒美、新たな刺激

岡 綾子（関西学院大学大学院文学研究科）

この度は、2014年度日本在住学生会員の ABAI/SQAB 参加に対する助成をいただき、誠にありがとうございました。 ABAI40 回大会の体験の報告をいたします。

ABAI40 回大会は、シカゴで行われました。シカゴはアメリカ大陸のほぼ中央、ミシガン湖（ほぼ海にしか見えませんが）に接しています。この冬の大雪波で凍りついたシカゴの街をニュースでご覧にな

った方もおられるかと思いますが、ABAIが行われた5月の末は、初夏のとても過ごしやすい良い時期でした。シカゴの街は、美しい高層ビルが立ち並び、新しいものと古いものが混ざったとても興味深い町でした。鉄道の駅や通路に、子どもの腫が大写しになった写真の下に「アイコンタクトを避けるのは、自閉症のひとつのサインです」と書かれた民間の療育センターの大型広告が何枚も貼ってあり、さすがアメリカ、と驚かされました。

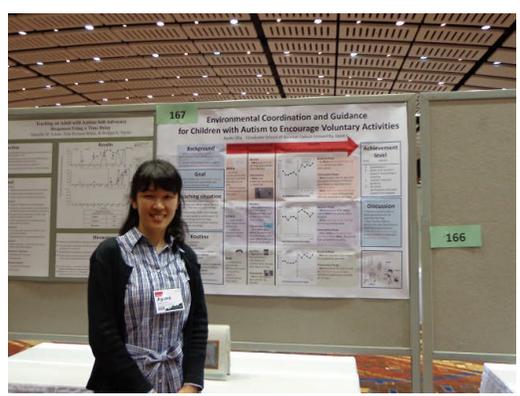
シカゴのダウンタウンからバスで15分程行ったところにABAIが行われたマコーミックプレイス・コンベンションセンターがあります。アメリカ最大のコンベンションセンターで、幕張メッセの向かいに道を挟んでインテックス大阪がある（わかりにくい例えですみません）という感じです。館内のちょっとした移動が一苦勞で、プログラムとプログラムの中の10分間には、みんな大急ぎで移動をしなければいけません。大きな会場にふさわしい大きな規模の大会で、たくさんのシンポジウムや講演、ポスターセッションがあり、また参加者も大勢いらして、こんなにも多くの方が行動分析学を学び研究されているのだと改めて実感しました。

私は自閉症スペクトラムのある子どもの社会的相互交渉について研究をしておりますので、それに関連したシンポジウムやポスターセッションに参加しました。療育センターの発表がとても多く、またどれも活気あふれるプレゼンテーションで、内容のみならず研究者としてのコミュニケーション・スキルについても大いに学ぶことができました。国が違えば生活環境や文化、対人関係の構築に求められるスキルや環境設定が違いますから、これまでの自身の視点とはまた違う新たな視点からの実践や研究に触れることができ、大変新鮮な驚きや学びがありました。残念だったのが、スピーカーが言われた冗談に私が笑うタイミングが、いつも人より2テンポ遅かったことです。この日のために、学部生の英語の授業に潜りこんだり、英語のプレゼンテーション講習を何度も受けたりしてきたのですが……。来年までにリスニングに磨きをかけようと自らに誓いました。

私のポスターセッションでは、特別支援学校の朝の会の授業改善についての発表を行いました。ポスターセッションは世界一広いボールルームの端で、受付や

ブックショップや療育センター等のブースと併設して開催されました。私のポスターの掲示場所は、ただでさえ端のポスターの掲示場所の中でも一番壁際で、168枚中4枚だけ壁を向いて貼るというすごい場所でした。しかも学会の実質的な最終日の午後7時から午後9時のセッションとあって、多くの方が帰ってしまわれた時間帯でした。ブックストアはもう品薄、療育センターのブースはほとんど店じまい状態の中、ポスターセッションを迎えました。そこで妙に親近感の湧いた“すみっこポスター4チーム”は「これは誰も来ないねえ」と笑って、互いのポスターの交流をしてみました。ところが、写真や絵を多用した私のポスターに目をとめてくださる方々が意外にもいらっしゃり（他の方のポスターは細かい字とグラフでびっしり、というものが殆どでした）、色々とディスカッションをすることができました。中でも、お二人の方には限らずポスターを見ていただき、細かい点までご質問やご意見をいただくことができ、本当に勉強になりました。

また、ABAIのプログラムには、シンポジウムやポスターセッション以外にもジョギングやヨガ、ケータリング付のレセプションやダンスパーティー等のイベントもあり、学び以外にも十分に楽しむことができました。今回のABAIへの参加は、これまでの努力への大きなご褒美であり、今後の研究への新たな刺激となりました。より一層精進していきたいと思います。今後とも、学会の先生方のご指導をよろしく願いいたします。ありがとうございました。



## <ABAI 2014 体験記 (2)>

### 初めての国際学会参加

三島 大輝 (立教大学大学院現代心理学研究科心理学専攻)

今年の5月、ABAIに参加してまいりました。今回、国際学会への参加は初めてだったのですが、1人で海外に行くことも初めてでした。また、英語がうまく話せるわけでもないため、心配や不安が多かったです。しかし、海外の学会は、どのような雰囲気なのか、どのような人がどういった発表しているのかを、直接自分で体験して確認したいと思っていました。また、お世話になった先生が後押しをしてくださったおかげで、学会の参加にいたることができました。

ABAIは23日から27日の5日間の日程で開催され、初日は主にワークショップ、2日目からシンポジウムとポスターセッションが始まりました。私のポスター発表は3日目でした。そのため、発表前に他の研究者の方々の発表を聞くことができ、参考になりました。また、会場内では、行動分析学に関する洋書が数多く販売されていました。その洋書の中には、日本では販売されていないものが多くあったので、それらを手にとって見るだけでも、楽しむことができました。また、ABAIのロゴマークが入ったグッズも販売されていました。その中でも、シカゴの文字が大きく入ったクールなデザインのTシャツ、歴代の行動分析学の発展に大きく貢献した方々の写真がずらりと並んだマグカップがあり、それらを購入し、今では研究室で愛用しています。

私の発表には、日本の大学院生や著名な先生方、海外の学生や先生方が聞きに来てくださいました。日本の著名な先生方には日本語で説明させていただき、貴重なご意見を伺うことができました。異国の地で、同じ日本人の方が発表を聞きに来てくださることは、とてもうれしいことでした。海外の学生の方々が聞きに来てくれた際に、英語の原稿を準備していました。しかし、聞き手が退屈しないように、なるべくその原稿を使わずに説明しようと心がけました。

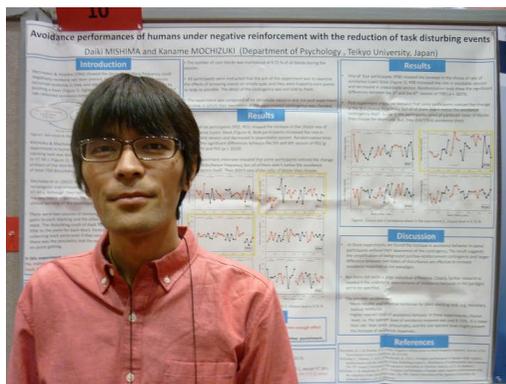
私が説明している際に、相槌を打ったり、不明な点に対して質問してくれたりする熱心な学生の方もいました。慣れていない英語にも関わらず、私の研究内容が海外の方々に伝わった時はとても嬉しかったです。そのため、最初は不安だった英語でのコミュニケーションをもっととりたいたいと思えるようになりました。しかし、内容に対する意見を完全に理解することは大変でした。

私の研究発表を無事終えて、他の方のポスター発表を見て回りました。その際に、A. Charles Catania先生と偶然お会いすることができ、挨拶をすると、快く返して下さいました。また、持参していた彼の著書である『*Learning fifth edition*』にサインをいただき、そのと一緒に写真まで撮っていただきました。ポスター会場によく来られていると聞いていたので、いつかお会いできるかもしれないと思い、常に持ち歩いていました。実際にCharles先生のサインの入ったこの本は、一生の宝物になりました。

最後に、国際学会参加の経験を通して、英語でのコミュニケーション経験の不足を改めて痛感しました。しかし、聞きに来てくれた人々になんとかして自分の研究内容を伝えたいという思いが強くなりました。次回までにはこの経験不足を補い、今回より上手く説明し、また、相手の意見に対して適切に答えられるようにしようと思いました。国際学会の場で発表することで、反省する点も多かったのですが、自分の研究や英語の勉強に対して、よりいっそう力を入れて頑張れるようになったと思います。研究者として成長する良いきっかけになりました。

今回の40th Annual Conventionへの参加は、日本行動分析学会の制度で、「日本在住学生会員のABAI/SQAB参加に対する助成事業」によって、実現できたことでした。この助成のおかげで、私は学会参

加をより楽しむことができ、より勉強することができました。JABA 会員の皆様とお世話になった方々にお礼を申し上げます。大変貴重な経験をさせていただき、ありがとうございました。



## 編集後記

J-ABA ニュース No. 75 (2014年夏号) をお届けします。今号は、山口薫先生の本学会の創立時の様子に関するインタビューや、若手の会員の方々の年次大会・ABAI 大会の体験記など、経験談が豊富に含まれています。他の人の経験談は、自分が経験していないことについて教わることが多く、ためにもなります。

最近日本各地で、これまでになく規模の大雨や洪水などの災害が起こっていますが、これらは、私たちが、自分で経験したことのない事象に対処するのが苦手

であることを示しているように思います。

100年に1回の頻度で生じる大災害は、多くの人にとっては初めての経験ですので、自分の経験を生かして対処することは難しいです。災害時に取るべき行動の指針として役立つルールを、他人の経験に基づいて作り出す方法が求められているように思います。

(DS)

## J-ABA ニュース編集部よりお願い

● ニュースレターに掲載する様々な記事を、会員の皆様から募集しています。書評、研究室紹介、施設・組織紹介、用語についての意見、求人情報、イベントや企画の案内、ギャクやジョーク、その他まじめな討論など、行動分析学研究にはもったいなくて載せられない記事を期待します。原稿はテキストファイル形式で電子メールの添付ファイルにて、下記のニュースレター編集部宛にお送りください。掲載の可否については、編集部において決定します。

● ニュースレターに掲載された記事の著作権は、日本行動分析学会に帰属し、日本行動分析学会ウェブサイトにて公開します。

● 記事を投稿される場合は、公開を前提に、個人情報等の取扱に、十分ご注意ください。

〒582-8582 大阪府柏原市旭が丘 4-698-1  
大阪教育大学 大河内研究室気付  
日本行動分析学会ニュースレター編集部  
大河内浩人  
E-mail: okouchi@cc.osaka-kyoiku.ac.jp